

家族みんなが演出家

～ファミリーシアター～

チャレンジステージ

小松原修

男

養護学校教諭

840-0027

佐賀市本庄町本庄1233-4

[samukomatsubara@yahoo.co.jp](mailto:samukomatsubara@yahoo.co.jp)

090-1089-8832

チャレンジステージは、1999年に結成されました。障害のある人たちが演劇やダンスで活躍できる環境を作ることが目的でした。当時、全国的にも障害のある人たちが演劇をすること自体、珍しく、中でも寝たきりの障害の重い人がメンバーとして活動している事例は稀少なものでありました。月2, 3回、西与賀コミュニティーセンターで練習をし、1年に3カ所程度（県内だけでなく北九州でも）でステージを行ってきました。チャレンジステージでの取り組みから、県内で芸術活動を営んでいる障害者、あるいはそのサポーターとのネットワークが発展してきました。そして、障害者の芸術祭（バリアフリーディーンさが）の開催、NPO法人アートフルの設立へと様々な形で、障害者の芸術活動自体が、佐賀の人たちに認知されるようになってきました。

チャレンジステージは、結成から5年経ち、メンバーも入れ替わりを繰り返してきました。今では、寝たきりの障害の重い方は一人もメンバーにはいません。というのも、練習場所まで、あるいはステージに送迎することが、家庭の事情、あるいは健康状態の変化などにより困難になってきたのでした。本人だけでなく家族の人たちも、活動を継続したいと思いながら、やむなく参加を断念してきたことが大きな理由でした。私は、障害のある人たちが演劇を通じて、様々な人たちと繋がればと思ってきましたし、障害のある人たちが自身が演劇の中で自分を表現できるようにサポートしてきたつもりでした。そこには、地域の中にまず足を運んでほしいという、自分勝手な想いがあったのでした。物理的に難しいというメンバーの現実遭遇し、来てもらうことに固執していた自分を深く反省しました。そこで、来ることが難しいのであれば、こちらから出向くことも考えよう！と新たに他のスタッフと心に決めたのでした。方針は固まったのですが、今度は、これまでのチ

チャレンジステージの取り組み方を踏襲して、同じようにメンバーの家に出向いて活動ができるのかという問題に遭遇しました。それまでは、ストーリーをもとに、何人もの人たちで一つの作品を作り上げることを目指していたのです。一年かかってようやく一つの作品が完成するという取り組みだったのです。毎回、出向いた先で練習をしても、結局はステージ公演の時には、送迎をする必要が出てきますし、健康状態などによっては毎回練習に参加することは難しいわけです。また誰かの家に行くということは、他のメンバーを送迎する必要があるということです。みんなで一つの作品を練習を重ねて作り上げるという従来の形は、出向くという方針の中では、矛盾が多すぎてメリットがないということになりました。そこで、出向いた先で、何を優先するべきかを考えました。考える際、健康状態のこともあり、毎回参加することは難しいのだから、練習という形は取るべきではないということは条件として踏まえるようにしました。出向いた先で、劇を見てもらうということも考えましたが、障害のある人たちが演劇の中で自分を表現することを優先したかったので、どうしても障害のある人たちに劇に参加する形を取りたかったわけです。演劇に参加するには練習が必要だという固定観念を取り払う必要が出てきました。このような発想から即興演劇というものに注目するようになったのです。以前から自分を含めて数名のスタッフは即興演劇のトレーニングをしていましたが、即興で演劇をするスキルを身に付けるには相当な時間と労力が必要になります。突然出向いた先で、障害のある人たちに即興で演劇をしてもらうというのには、多大なる無理が生じてしまいます。この問題に遭遇したとき、偶然にも「プレイバックシアター」という演劇のスタイルがあることを発見しました。これは、様々な問題があって、自分で演じることが難しい人たちの想いや

その方々の思い出の一部を即興演劇の演者が代わりに演じるというもので、当事者の方々は、演出家（ディレクター）になって、「ここはこうしてほしい」「このキャラクターはこう演じてほしい」と簡単なイメージを伝えることになります。この発見は、私には大きな転機となりました。出向いた先で、この「プレイバックシアター」に近いものをしてみようと思い立ちました。本物の「プレイバックシアター」では、演じる我々のトレーニングが相当必要でもあるし、出向いた先の方々に、いきなり演出してくださいということも難しいと思いましたので、簡単に演出できるような部分もあるし、誰でも参加して楽しむことができる部分もある、全く新しい「シアター」を考えることにしました。それが「ファミリーシアター」でした。簡単に演出できるような部分には、「あなたの家族を当てちやいますゲーム」や「名作2分劇場」というもので構成しました。「あなたの家族を当てちやいますゲーム」では、生活のワンシーンを、即興演劇のトレーニングを積んでいる私たち（3名～4名）が、家族に3つ質問をして、我々はその家族のワンシーンを演じます。シーンは、それぞれ我が家の楽しいひとときと慌ただしいひとときを教えてください。そのシーンをその家族になって演じるわけです。家族のことは家族しか分からないので家族全員が演出家になります。違っていたり、イメージに合わない場合には「ストップ！」をかけて、どこが違うかを指摘します。でも「うちでは、こういう風にします」と例示することはしません。できるだけ真の家族のシーンに近づけるように私たちはTake 3まで続けて、家族のみなさんから「OKです」という言葉を目標に頑張るというものです。

「名作2分劇場」では、様々な世代で人気のある「名作」（水戸黄門やデカレンジャー、冬のソナタなど）を写真カードで準備しておきます。家族のどなたでも構いません。誰か

が一枚カードを引きます。たいてい障害のある人とお母さんが一枚ずつ選びます。次に味付けカードというものを一枚選びます。味付けカードとは、例えばホラー映画風や時代劇風などというものです。例を挙げますと、「名作」から白雪姫を選び、味付けカードから時代劇風を選ぶと、時代劇版白雪姫というタイトルができます。これを私たちが2分間で演じることになります。2分は家族の方にタイムキーパーになっていただいて図ります。家族の方々から「よういスタート!」、2分経ったら「はいカット!!」と言っていただきます。最後に、満足度のチェックをします。これは2分間のパフォーマンスが良かったら、大きな拍手、ダメだったら「ブー」と言っていただくだけのものです。

また、誰でも参加できるものとして、「インプロゲーム」という演劇の様々な要素をゲームにしたものを取り入れるようにしました。家族の方々と会話のキャッチボールのように歌を歌ったり、3人で2人羽織のようなことをしたりと内容は様々です。

ファミリーシアターは2004年1年間で10回、障害のある人たちのご自宅あるいはグループホームで公演させていただきました。当初は、チャレンジステージに参加していたメンバーのために考えたことでありましたが、この取り組み方ならば、他にも試してみたいという方がいるはずだと考え、チラシを作ったり、口コミで宣伝したりして、営業活動をしました。その結果、9家族からお声をかけていただくことになり、延べ10回もの公演を行うことができました。障害のある人たちはもちろんのこと、家族の方々やヘルパーさんが大笑いしている様子が実に印象的でもあり、とても幸せなことでもあると感じました。障害のある方々が普段生活している場所と時間の中で、私たちは過ごさせていただくことができます。公演が終わってから、家族の方々と話し込んでしまうことがしばしば

です。そこでは、普段どんな生活を送っているのか、好きなテレビは誰と見ているのかとかどういう角度から見ているのか、お風呂にはいるときには誰とどうやって入って、どんな話をしているのかなど、とても具体的なことばかり聞かせていただくことができます。

そのような情報は、次回の公演の貴重なデータになり、その家族の方々の、さらなる要望やイメージを演じることができるようになります。2004年最後の公演は、親の会のクリスマス会でのものでした。通常は、一家族ないしは二家族が観客でもあり、演出家でもあるのですが、このときは総勢20家族もいらっしゃいました。「あなたの家族を当てましょうゲーム」では、ある家族が他の家族の方からの強い推薦で、対象になりました。通常は、私たちがその家族に、3点ほどインタビューをさせていただくのですが、このときには、他の家族の方々から、質問が殺到しました。質問の内容も、「お父さんとの馴れ初めは？」と、私たちが初対面ではなかなか触れることができない、とても主婦感覚の鋭いものだったりバラエティーに富んでいました。私たちはその情報を大切にさせてもらいながら、その家族の様子を演じたわけですが、かなり細部にわたって、「ブー」をいただき、ときには現実とは違うのだけれど、面白いからOKだというように演出していただき、見ていた他の家族のみなさんも大笑いしながら、私たちにもそしてその家族にも大きな拍手を送っていました。演出家なんて恐れ多くてできないと口を揃えて言われていましたが、しっかりと演出されていました。演出する中で、家族の方が障害のある方に必ず、「うちじゃあ、こんなことしないよねえ」と声をかけられていました。家族全員で演出家になっていた瞬間でした。

あるお宅に出向いて公演をしたときでした。犯人を演じるゲームをしていたとき、その

家のお父さんが、ものすごく生き生きとした表情でそのゲームを見られていました。「お父さん、代わりに入りませんか？」とお誘いすると、待ってましたとばかりに、子どもさんの部屋から玩具を持ってきて、小道具として使ってゲームを楽しんでいました。私たちの公演をそれまでは、お父さんに抱えられ、時にはお父さんから話しかけてもらっていたのに、今度はそのお父さんが目の前で演じる側になっているではありませんか。その家の障害のある方（娘さんでしたが）は、そんなお父さんを見て不思議そうに、でもとても嬉しそうににこにこしながら見ていました。

私には、一つの夢があります。それは、私が演出家としてステージを作るのではなく、障害のある方々が演出家として、私を演者として使ってステージを作ってほしいというものです。身体を動かし、セリフを話し、何かを演じることだけが障害のある方々が演劇を通じて自分を表現することではないと思っています。誰か演者とイメージを共有し、その演者に演じてもらうものも、自分を表現することだと思っています。ファミリーシアターは、障害のある方々の余暇活動を豊かにするだけでなく、家族の絆を笑いを通じて確かめ合う時間として、あるいは私たちを通じて社会とつながるものとして、あるいは自分を表現する「アート」として、今後も発展していく可能性を感じて止みません。

2005年、早速一つ公演が決まりました。どんな家族の温かさに触れさせていただくことができるのか、とても楽しみです。